
魔法使いの夜

陸たまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの夜

【Nコード】

N5361I

【作者名】

陸たまき

【あらすじ】

王立魔法研究所に配属されたリア。王国にはすでに、魔族からの脅迫状が届いていた。彼女は王子とともに、さらわれたメイドを助けに向かう。

第1話

「私を連れて行って…お願い」

断れば、消えてしまいそうな少女。

だから私は、その手を取った ……。

王立魔法研究所。

王都郊外に設置されたここは、国内でもずば抜けて力のある魔法使いしか属することの出来ない、最高の名誉と権威ある職場だ。王の直接支配下に置かれている。主な仕事は、国内で起こる魔法がらみの事件の解決。王室の警護。国中に設置された警備隊の詰め所に配置された、魔法使いを統括する役目もある。

その責任は重い。

魔法大国サミンのエリート集団として、彼らの行動は常に国内外に注目されている。そのため、失敗は許されない。

だからこそ人々の信頼は厚く、数々の魔法使いの羨望の的でもあるのだ。

その研究所。

石造りのそれは、見ようによつては昔の牢のようでもあった。側面の丸い、高い塔。所々に窓があり、バルコニーらしきものもある。誰でも訪れていいことになってはいるが、滅多に人が訪れることはない。…のだが。

その研究所を見上げながら、近づいてくる1人の女がいた。

ずいぶん若い。おそらく10代の後半か、20代前半だろう。彼

女は入り口の前に立つと、かぶっていたマントのフードをとった。蜂蜜のような薄い茶色の短い髪が、風になびく。茶色の目が、楽しそうに笑っていた。

木の扉が開く音に、受付に座っていたタニア・トレは顔を上げた。眼鏡の向こうには、依頼人にしては若すぎる女が立っている。相手はタニアに気づくと満面に笑みを浮かべた。

「はじめまして」

そう言いながら勢いよく頭を下げる。

「今日からここで働くことになったリア・マックフィーンです」

「…ああ」

タニアはいすから立ち上がると、リアの前に立って手を差し出した。

「受付のタニア・トレよ。よろしくね」

「は、はい」

リアは緊張した面持ちで手を握り返してきた。

「ごめんなさいね。実は今所長は地方に行っていて。私が代わりにいろいろ案内するように仰せつかっているの」

「あ、そうなんですか」

リアは少しがっかりしたようだった。それはそうだろう。この所長は、歴代最高の魔法使いだと言われている。リアのような若い魔法使いにとって、神様のような存在なのだ。

「それで…推薦状は持つてるかしら？」

「はい」

リアは慌てた様子でかばんをおろした。ずいぶんと古ぼけている。どうやら彼女は、かなりの距離を旅してきたらしい。

推薦状を受け取ると、タニアはリアにソファアを勧めた。自分も向かいに座る。

リアは地方の警備隊で魔法使いとして働いていたらしい。その隊長の推薦状と、王の許可証を確認すると、タニアは早速働き始めた。

まず、リアにお茶を入れる。それから部屋の案内。研究所の説明をしながら廊下を歩いていると、誰かが階段を駆け上ってくる音がした。

現れたのは若い男だった。黒髪と黒い瞳。一目でルーン一族だと言うことが知れる。

「ちょうどよかった。アレン、あなたの新しいパートナーよ」

ここは全て2人1組で行動している。アレンのパートナーが引退したので、そこにリアが入ることになったのだ。

「はじめまして。リア・マックフィーンです。よろしく願いします」

リアはアレンの若さに驚いたようだ。当然だろう。ここは20代の若者がいるような場所ではないのだ。間を置いて、アレンが言った。

「よろしく。…早速だけど、仕事なんだ」

「あつ、行きます。行かせて下さい！」

タニアの後ろから、リアが飛び出す。

「ちょ、ちょっとアレン、彼女今日来たばかりなのよ!？」

「平気です!」

彼女が言つと、アレンは少し笑ったようだった。

「気をつけてー!」

タニアはそれだけ言つと、廊下を引き返した。

アレンは空を飛ぶわけでもなく、ただ早足で歩き続けている。

たくさん聞きたいことはあるのだが、緊迫した様子にリアは声を発することが出来ず、黙って彼の後を追っていた。

研究所の周りは高い木で覆われていて、細い小道を抜けると市街地に出た。すぐ近くに王宮が見える。リアが来るときに通った道だ。

さすがに王都が近いだけあって、通りは広くて賑やかだ。人々の笑

い声や掛け声にあふれている。きっと春が近いせいもあるだろう。リアはだんだん楽しくなってきた、きよろきよろと辺りを見回す。通りの服屋では、季節を先取りした明るい色彩の服が並べられている。旅人も多く、酒場からは陽気な歌声が聞こえてきた。

「あつ、すいません」

人にぶつかっても、誰も怒ったりしない。きつとおのぼりさんだと思われているのだろう。苦笑したり、笑って通り過ぎていく。

頭の上のため息がふってきた。

「…前見て歩け」

びつくりして上を向くと、心なしか焦った顔のアレンがいた。リアより頭ひとつ分は背が高く、彼女は影にすっぽり包まれてしまう。

「…あ。すみません…」

どうやら自分はいつの間にか、彼とはぐれていたらしい。慌ててリアを探してくれたのだろうか。

アレンは黙って背を向けると、再び歩き出した。リアも今度はしっかり後を追う。

少し先に橋があり、そこを渡るともう王宮の正門だ。

目的地は王宮なのだとようやく理解出来たリアは、急に体が緊張するのを感じた。

アレンは橋を渡らず、道を曲がると王宮を取り囲む堀に沿って歩く。ちようど王宮の裏の辺りに小さな橋があつて、そこを渡るともう城壁の中だった。

正門から入らない。そこがすでに差し迫った状況を表しているような気がして、リアはごくりとつばを飲み込んだ。

そこは住み込みの使用人寮のようだった。細長い廊下の両端にびっしりと扉があり、背後の扉を閉めて振り向くと1人のメイドが待っていた。

彼女はケリーと名乗った。

「お待ちしておりました。こちらです」

どうやら事情を知っているらしく、青白い顔をしている。

案内される間に気づいたのは、事情を知っていて不安そうにリア達を見ていくのは着飾った人々ではなく、この城で働いている人間達のようなということだ。

やがて2人が案内されたのは、2階の重苦しい扉の前だった。

「こちらです」

ケリーはそういうと、扉を押し開けた。アレンに続いて、リアも中に入る。入った途端に倒れそうになってしまった。

そこに国王がいたからだ。

「ああ、アレンか。待っていた」

細長い机の上座に座った王が言った。周りの席についているのも、きっとリアは想像できないくらい偉い人に違いない。その威圧感に、彼女はたじろぐ。けれどアレンは表情を変えないまま、淡々と答えていた。

「お待ちせして申し訳ありません。それで、その後魔族からの接触は？」

まぞく……!?

リアは思わず固まった。けれど、なんとか頭を動かして話をつなぎあわせる。

概要はこうだった。

最近この近くの、薬草が採れる西の森に、魔族が住み着いたという噂が広まった。

その場所へ今朝、アンという12歳のメイドが薬草を摘みに行っらしい。らしいと言うのは、アンは出掛ける時に「ちよつと街へおつかいに行ってきます」としか言わなかったからだ。結局、昼になっても彼女は帰ってこなかった。

最初に異変に気付いたのは第2王子のルーセルだった。彼はアンと歳も近く、仲の良い話し相手らしい。

しかしその時にはもう、王の元に魔族からの脅迫状が届いていたのだ……。

そして今、リアの目の前にはその脅迫状がある。
毒性の強いポップルという葉に、魔力を持った光輝く字が躍っている。

『アンは預からせていただいた。代わりに血の盟約を受けた水晶を要求する。契約は、次の満月の夜まで有効だ』

最後に細く赤い血で、魔族の名前が書いてあった。フォロン。
どす黒く赤いそれは、間違いなく人の血だ。

満月の夜まで、まだ7日ほど時間はある。アンの命はあと7日だった。

「あの…この水晶って何ですか？」

リアは壁際に寄って、そつとケリーに尋ねてみた。

「紫水晶と言って、この国の宝です」

紫水晶。

ようやくリアにも合点がいった。

何代もの前の王の時代に、ある魔族が王との友情の証として残した、途方もない魔力を持つ宝石だ。その力のおかげで、この国は魔族とも対等に渡り合ってきた。

それを守ることもまた、リア達の役目でもある。

まさか、紫水晶を渡せるわけがない …。

それでも、リアは人の命を見殺しにたくはなくて、顔を曇らせた。

「それで、具体的に僕等は何をすればいいんでしょう？」

表情を変えないでアレンが問う。

国王もまた、それに静かに答えた。

「フォロンの抹殺だ」

「え……」

リアは息を呑んだ。頭に血が昇っていくのがわかる。
まだ12才の女の子を、見殺しにするというのか？

「ま……」

「待つて下さい！」

リアが抗議しようとしたら、甲高い声にさえぎられた。視線を向けると、扉の前に黒髪の少年が立っている。黒色の瞳からは今にも涙がこぼれそうだった。

ルーセル・サミン・オディアート。アンと仲がいいと言う、この国の第2王子だ。

「王子っ。ああ、申し訳ありません。王子っ、お戻りくださいっ！」

バタバタと足音がして、彼を追い駆けてきたらしいメイドが現れる。けれどルーセルは差し出された手を振り払って、搾り出すように叫んだ。

「アンを助けて下さい！…紫水晶なんかよりも、大切なものがあるだろう…！？」

追って来たメイドが青い顔で息を呑む。

誰も何も言えなかった。

「なんで…どうして誰もアンを助けてくれないんですか」

父親の瞳を真っ直ぐに見つめて、ルーセルは言った。

怒りを込めた口調で。父を心から信頼している、子供の口調で。

「アンは生きてるんでしょう…」

ああ、この王子はまだアン of 安否さえ知らないのだ。

口を開きかけたリアを遮り、アレンが抑揚のない声で言い放った。

「王子には教えられません。どうか部屋にお戻りください」

その言葉が、必死に王子としての威厳を守ろうとするルーセルの仮面を、剥がしてしまったようだった。

「じゃあ僕がアン of 身代わりになる。西の森に行って、魔族に会ってやる！」

「王子、落ち着いて下さい」

ケリーがルーセルをたしなめる。確かに今の王子は冷静な判断が出来なくなっている。けれど、これが王子の本音で、必死な言葉には誰も国の利益を説くことが出来ない。

「どうして何も教えてくれないんだ！僕は王子だぞ！？」

「ルーセル。子供のようなことを言うんじゃない」

「子供のままでいい！」

王ですら言葉を失った。

「アンは…？」

目に涙をいっぱいためて、けれどもちゃんと物を見ようと涙をこらえながらルーセルは言った。

もし死んでいるとしたら、この王子はどうなってしまふのだろう。リアがそう思った時、アレンが冷たく言い放った。

「アンは、死にました」

第2話

ルーセルが真つ青な顔で部屋から飛び出して行くのを、リアは視界の端に捉えていた。

怒りでよく前が見えない。

アレンはきつと涼しい顔で隣に立っているだろう。何か会話が交わされている。

彼が部屋から出て行くので、リアも慌てて後を追った。

「さつき、どうしてあんなこと言っただんですか」

早足で歩く背中に問う。

自分の声が非難がましく聞こえることはわかっていたが、特に悪いことだとは思わなかった。

リアは全てのものに対して怒っていた。

ルーセルを傷つけたアレンにも、それを止めなかった王にも、そして全てが終わってから、彼の後を追うしかない自分にも。

アレンは感情の読み取れない声で、歩調を緩めず言った。

「王子には悪いことをしたと思ってる。でも計画の邪魔だ。彼がいたら、正確さを欠いてしまう」

きつぱりと言うアレンに、咄嗟にリアは言い返せない。

「王の依頼は魔族の抹殺だ」

「じゃ、じゃあ…アンは見殺しにするってことですか」

ようやくアレンが足を止める。

どうしてこの人はこんなにも、人の命を軽んじられるのだろう。

「じゃあ聞くが、例えばアンを助けたとして、それで紫水晶が奪われてもいいのか？」

「だって…これじゃああんまりです！」

せめて「努力する」とだけでも、言っただけであげられなかったのか。

せめて、アンが生きていることだけでも。

「たった1人の人間のために、この国全てが犠牲になってもいいっ

て言うのか？」

「……！」

リアは何とか気持ちを落ち着けるように、細く息を吐いた。

「その為に、たった12才の子供を見殺しにして、それで何かを守ることになるんですか……！？」

ため息をついたアレンの瞳には、ただ面倒くさそうな感情が宿っているだけだった。

「もういい。お前、研究所に戻れ。これ以上関わるな。それで、研究所の契約書をもう1度読み返すんだな」

吐き捨てるようにそう言う。

「何歳とか、そんなことは関係ない。……この国がここまで来るために、多くの人間が犠牲になってきた。どんな国だって、数え切れないくらいたくさんの人間の、血の泉の上に成り立ってる事を忘れるな。この国を守るのが、俺達の役目だ」

それだけ言うと、さっさと踵を返して行ってしまった。

1人残されたリアは、もう怒りやら何やらでいっぱいだった。

アレンの背中を見送るのも悔しくて、元来た道に戻って走り出した。

この街に着いたのは、今日の昼だと言うのに。

太陽はもう傾き始めていた。

それにしても何という広さだろう、この庭は。

リアがいるのは王宮の中庭だった。めちゃくちゃに走っているうちに、ここまで来てしまったのだ。

「はぁ……」

彼女は重いため息をついた。

今日1日だけで、今まで信じてきたものが全て打ち砕かれてしまった感じがした。

実はリアは昔、研究所で働く魔法使いに命を救われたことがある。

だからこそ、同じように人を助けたくて、誰かの役に立ちたくて、ここまで頑張ってきたのに、どうしてアンを助けることが出来ないんだろう。研究所の人間は、もっと優しくて、もっと強いんじゃないのか？ たった1匹の魔族から、女の子1人救うことが出来ないなんて。

アレンのことを思い出し、リアは奥歯を噛み締めた。

…違う。今は自分がその魔法使いだ。彼が出来ないなら、私がやればいい。

不意に背後の茂みから音がして、リアは顔を跳ね上げた。

黒色の瞳が、リアを射抜いた。

「お…」

庭を縫って来たのだろうか、所々花粉を身につけた第2王子は、そこに座っているのが魔法使いだと気付くと、静かにその場に座った。夕日を浴びて輝いたルーセルの瞳は、気のせいかな少しだけ濡れているように見えた。

リアはそつと視線をそらす。

「魔法使い」

「…はい」

リアは頭を下げたまま首をひねる。ルーセルの声は、絶望も諦めもしていない声だった。

何か、決意の込められているような。

「僕を、西の森に連れて行ってくれ」

その瞳がリアを見据えて光る。やけになって言っているのではない、冷静な声。

それでも、やっぱり…。

「…王子。アンはもう…」

リアは言葉を搾り出す。さっきはあれほど非難していたアレンの言葉を、今自分は言おうとしている。

でも、危険があるとわかっていて王子を連れ出すことは出来なかった。

もしかしたら、アレンもこんな気持ちを味わったのだろうか。

「魔法使い」

ルーセルが遮った。口の端を上げて、どこか不敵な笑みを浮かべる。

「お前、嘘つくの下手だな」

凍りついたリアを見上げて、ルーセルは言う。

「アンはまだ死んでなんかいない」

その瞳はリアを見据えたまま動かない。

「アンは本当は生きてるんだろう？だって魔族は約束を違えない。

大体、紫水晶が手に入ってないのに殺すなんて変じゃないか」

それはもはや確信している口調で、リアは嘘をつけないことを悟る。

「頼むよ。連れて行ってほしいんだ。このまま何もしなかったら、

アンは死ぬ。……僕が、アンを助けなきゃ」

「……出来ません」

心は痛んだが、そう言うしかなかった。ルーセルは泣きそうに顔を歪めた。

泣くかな、と思った。少し残酷な気持ちになる。

泣いて部屋に閉じこもっていればいい。そうすれば、彼の身は安全だと安心出来るから。

ああ、私にアレンを責めることは出来ないな。

リアはルーセルに向き合って、腰を屈めて目の高さを合わせた。なんだか子供を諭す母親のような気分だ。

「アンは、私が助けます」

アレンが言った意味が、今のリアにならわかる。

この王子はまだ子供なのだ。頭は回るかもしれないけれど、感情にまかせて何をしでかすかわからない。

「森は危険です。王子は、ここに居て下さい」

涙をこらえてうつむいていたルーセルが、突然立ち上がった。

「死ぬのなんか怖くない。何もしないでアンが死んじゃう方が怖い！アンを助けて死ぬなら、それでいいんだ！！」

「……………」

リアは言葉を失った。

理性的な、常識的な言葉はどれも、言う意味がないとわかったからだ。

ここまで言われたら、引き下がるわけがない。

「わかりました」

ほつと笑うルーセルを見て、魔法使いはただしと加える。

「生きて帰りましょう。3人で、必ず」

出された食事をぱくぱくと平らげるルーセルを、母親も給仕達も、あっけにとられて見ていた。

そこに父の姿はなく、第1王子は他国へ留学中だ。

食堂の広く長い机。その真ん中に、母親と息子は向かい合うように座っていた。

「ルーセル。落ち着いて食べないと、喉をつまらせるわよ……」

見かねた母親の忠告も聞かず、ルーセルは黙々と食べている。

あんなに仲の良かった女の子が命の危険にさらされているというのに食欲を発揮する息子を、王妃は複雑な面持ちで眺めた。

あつと言う間にルーセルは食事を終え、立ち上がる。

「ごちそうさまでした。おやすみなさい」

そして、彼女が返答する前に出て行った。

「どうしちゃったのかしら……？」

彼女は複雑な気持ちで首を傾げた。

「誰も入るな」と言い残して、ルーセルは扉を閉めた。メイドは彼の気持ちを勘違いしたのか、何も言わずに通路に消える。

それを見送ってから、彼は扉を閉めベットのシーツを剥ぎ取った。

ここは3階だ。

抜け出すには魔法を使うのかと尋ねたルーセルに、魔法使いはにやりと笑った。それなら、とっておき

の方法がありますよと。

外の窓から音がしたので、ルーセルはそつと近づいた。

「私です」

そつと辺りをうかがうように入って来たのはリアだった。彼が目を丸くしている前で、彼女はなにやらシーツをぐるぐるとほどこいている。

「外から来たのか…?」

「そうです。上から」

と言いいながら、楽しそうに上を指差す。よくわからない。が、ルーセルの目はリアの手の中に奪われた。

シーツの中から杖が出てきたからだ。

「うわぁ」

思わず歓声もれる。こんな間近で杖を見たのは初めてなのだ。

「触ってみてもいい?」

「どうぞ」

持ち上げてみると意外に軽い。指の先からひじくくらいまでの長さだ。すいふんと古い木だ。自然に生えるのだろうか、ぐるぐると渦を巻いている。先端の方は細くなっている、青い宝石がいくつかちりばめられ、見た事のない字が躍っている。

「すごい…。どうやってこんな…」

振り向くとリアはシーツを結んだり伸ばしたりして、ロープを作っていた。その手つきの鮮やかさにルーセルは目を奪われる。おまけに、出来たロープはどうやってもほどこけなかった。

「ええ…?」

「これ知りませんか?」

「うん」

素直に頷くと、リアはいたずらっ子のように笑った。

「じゃあ後で教えてあげますよ。私の住んでた所では、子供の頃は皆こういう事をやるんです…ってそんな事言ってる場合じゃなかった」

言われてルーセルは黒いフード付きマントをかぶった。腰には短剣を収める。

他の雑多な道具をベツトに放り出し、真ん中辺りに寄せてから、ふとんをかける。これでももし誰かが覗いたとしても、寝ていると思うはずだ。

電気を消して、バルコニーに出る。

そこにはすでに黒いマントをかぶったリアがいて、バルコニーの手すりにさっきのシーツを結んでいた。所々に足をかけるための結び目を残しながら、下へと伸びていく。

「こつやるんですよ」

そう言つてバルコニーから身を乗り出すと、シーツにつかまりながらするすると、あっという間に下に降りてしまった。

ルーセルはただ口をぽかんと開けるしかない。

最初は怖くてどきどきしたが、すぐにそれは面白さへのどきどきに変わった。

子供の身軽さでロープに移ると、リアのように降り出した。

もうすぐ春だと言つても、夜の風はまだ冷たかった。

「さすが。男の子はこういうの旨いですね」

リアの方がすごいと思つたが、言うのは止めておいた。だって普通、若い女の人はこんなこと知らないはずだ。

「このシーツ…このままで大丈夫なの？」

リアは意味ありげに笑つと、手を伸ばして1番下の結び目をほどこいた。そして現れたシーツの橋を引っ張ると、何故だかシーツの結び目がどんどんほどこけて、手すりの結び目までほどこけて、全部のシーツが落ちてきた。

得意そうなリアを尻目に、ルーセルは不安そうに呟いた。

「どうやって帰るんだ…？」

第3話

2人はシーツを抱えたまま、月光から逃げるように影の合間を縫って庭を横切る。

先に行くのはルーセルだ。

王宮から抜け出す事自体には慣れているらしく、その腰を屈めて走る影は休まない。

「ここだよ」

ささやいてルーセルが止まったのは、王宮の隅、緑の生垣と分厚い壁の間。その壁からは、レンガがひとつ抜けていた。

覗いてみれば、その向こうは堀ではなく、ちゃんと地面が続いている。

だが、とても人間が通れる大きさではない。

「王子……」

ルーセルはその場にしゃがむと、慣れた手つきで周りのレンガを外し始めた。

「ほら、この辺り。粘土が弱くなって、簡単に外せるんだ」

あつと言う間にいくつかレンガを抜き取ると、するすると穴から外に出てしまった。

後に残されたリアは、呆然とその穴を見下ろす。

…そうだ…子供が使う抜け道だった……。

血の気が失せていくのを感じる。

王子はまだ12、3才。発育途中で、肩幅だつてない。

「どうしたの」

穴から顔を覗かせて、ルーセルが見上げてきた。リアの顔を見て、自分が失念していた事に気付く。

「大丈夫。他にもいくつか取れるんだ」

不安を飲み込んで、辺りのレンガを探る。座り込んだリアは、穴を見て、それからそびえ立つ壁を見上げた。

あまり多くのレンガを抜いてしまうと、崩れるかもしれない。

「だ、大丈夫です王子っ。それ以上抜かないで下さい！」

心配そうに見上げるルーセルを安心させるように微笑んで、穴から頭を通す。

そうさ、若い女性として、これくらい通れなければ恥ずかしいではないか！

「ああ、肩は片方ずつ抜くといいんだ」

ルーセルのどこか不安そうなアドバイスが振ってくる。

うつぶせになって、少しずつ前に進んで行く。服が汚れるのなんか、この際気にしちゃいけない。

ルーセルは一步下がって、心配そうにリアを見守っている。

子供の前で若い女が、しかも研究所の魔法使いがこんな事をするのは恥ずかしかったが、そんなプライドよりもリアの頭を占めているのはたつたひとつの事実だった。

……………通れない……………！！

「大丈夫？」

ルーセルの声に力無い笑みを浮かべて、ぐいっと体を進ませる。

ガリッと肩にレンガが食い込んだ。

「いつ！」

思わず声を上げたリアに駆け寄って、ルーセルは先に出ていた彼女の腕を引く張る。

「どうしましょう…。王子…。…………ハマりました…………」

ああもうやだ泣きそう。

「えっ！？」

何だってこんな事になったんだあたし、なんて情けない…………。

「で、でも。魔法使えば抜けられるんだろう？」

「出来ると思いますけど。…………でもこっつて魔法使つと、すぐにバレル仕組みになってますよ。だから…………アンを助けに行けなくなってますいます」

言ってるうちに、なんだか涙が出てきた。

魔法使いが王子に泣き言を言うなんて、なんて情けない。

地面についた頬が痛かった。

ふと、レンガが食い込んだ肩に手の感触を感じて、リアは顔を上げた。

「このレンガが、取ればいいんだろ」

リアの肩とレンガの隙間に手を入れて、ルーセルはそれを引っ張る。リアが驚いた顔をしていると、彼は怒った顔をした。

「ちゃんと出られるよ。だから、そんな泣きそうな顔するな。魔法使いがいなきゃ、困るんだから。それに……リアだってこんな間抜けな所で諦めるのやだろ！？……っと、ダメだ。こつち側、全然動かない」

反対側のレンガに手をかける。

リアは笑った。口元に笑みが沸いてくる。

そうだ。自分はアンを助けなきゃ。今のは少し、旅の疲れが出て弱気になったただけだ。

「あ、こつちは動く」

そう言っただけでルーセルがレンガを引っ張ると、リアの周りのレンガが振動するのが感じられた。

「それ……戻したほうがいいんじゃない？……崩れるかも……」

血の気が引いてそう言っただけで、ルーセルがちりと上を仰ぎ見た。しかしすぐに視線を戻す。

「大丈夫だよ」

「え、ええっ」

けれども周りのレンガが、大丈夫じゃない事を告げている。

「だっていつまでもここに居る訳にはいかないだろ！」

ルーセルがレンガを持つ手にぐっと力を込める。

「王子！危ないんですっ。本当に止めて下さい！死んじゃ……」

「大丈夫だってば！」

ドス

レンガが土に落ちる音を聞いて、リアはそつと目を開けた。
目の前には、尻餅をついているルーセルがいる。

「…ほ、ほら。大丈夫だって言っただじゃん」

けれどもルーセルの顔も青白くて、リアはようやく現実を理解した。
「王子っ！手、大丈夫ですかっ!？」

すんなりと穴から体を出して、慌ててルーセルの手をつかんだ。所々擦り切れて、血がにじんでいる。

「平気だよ。それよりも早くこれ直さないと」

「そうですね……王子」

「ん」

視線を上げずにルーセルは言う。

「ありがとうございます」

「うん」

ルーセルの隣に腰を下ろして、全部のレンガをこちら側に出してから今度はそれをひとつずつ元に戻していく。

「いつもこんなことしてるんですか？」

こんな場所に座り込んで、レンガを直す子供の姿を思うと笑ってしまふ。

「うん」

「それにしても。こんな抜け道があったら、泥棒に入られても文句言えませんよ」

「うん。…アンとふたりで探したんだ。小さい頃はよく、アンとふたりで遊びに行った」

今だって、リアから見ればルーセルはまだまだ子供だった。が、手を休めないルーセルの表情はよく見えない。

王子様っていうのは、きつと自分の子供の頃みたいに遊んでるだけじゃだめなんだろうという事しか、リアにはわからない。

最後の1個を静かにはめて、ようやく2人は立ち上がった。思ったよりも、ここまで来るのに時間がかかってしまった。月は空の真ん中に昇り、青白く輝いている。

2人がいるのは城の裏、町の西外れに位置する場所だと、ルーセルが教えてくれた。1歩踏み出すと、町の正門へと続く交易路だ。

「西の森は、あっちだ」

ルーセルが先に立って歩き出す。後ろについて歩きながら、リアは静かに魔法を紡ぐ。ルーセルは歩調を落として彼女の隣に並び、目を輝かせながら様子を見ている。

リアは杖を2人の周りに大きく弧を描くように振った。不思議に暖かい風が、2人を包み込む。

「…なんの魔法？」

ルーセルは自分の手のひらや体を見回してみるが、特に変わったところはないようだ。

「私たちの姿を見られないようにしたんですよ」

杖をしまいながらリアは言う。だが、本当は少し違った。これは結界だ。姿を見えなくさせることも出来るけれど、小さな衝撃くらいなら受け止められる。

魔法の波動がわかる者に対しては効果はないが、これだけ離れてしまえばアレンだって気付かないだろう。

「へえ…」

ルーセルもそれをわかったのだろうか。幼い顔に、ぴりつとした緊張が走った。

「あ、あの森が、西の森」

ルーセルがそう言ったのは、リアが想像していたよりも意外に早かった。

振り返ればまだ、視界の隅に町が見える。

少しずつ近づくにつれ、リアにもこの森の不気味さがわかってきた。木々がうつそうと茂っていて中の様子はわからず、差し込む月光も暗闇の中にぼうつと木の影を浮かび上がらせるだけ。時折、気味の悪い笑い声がし、続いて木の葉がざざと揺れる。森の入り口につくと、2人はしばし呆然としていた。隣に立つルーセルが、ごくりとつばを飲む音がする。

リアは気を取り直して、杖を取り出すと呪文を唱えた。ここには他の悪意を持った生き物がいるかもしれないので、結界の強度を強くしたのだ。

「王子、行きましょう」

杖を握り締めたまま、王子の背中を押す。

「ああ」

1度大きく深呼吸すると、ルーセルは森の中へと足を踏み出した。途端。

パライイイイン

ガラスの割れるような音が、体中に響き渡った。頭が割れるように痛む。

「うそ……」

結界が破られた。

リアが自覚するや否や、今度は前方から冷たい風が吹きぬけた。闇の底から渦巻くように、魔力を乗せた重い風。

……ここにいる。来てみる……

立ち止まったリアにルーセルは眉を寄せる。その顔色がひどく青ざめて見えたのだ。

「リア？」

「……なんでも、ありません」

リアは恐怖を笑顔の下に隠して、精一杯なんでもない風を装った。彼だっけきつと怖くて仕方ないに違いないんだから。無理に怖がら

せる必要はない。

「敵陣突入です。気を引き締めて行きましょう！」

第4話

「アンってさ、捨て子だったんだ」

リアはかすかに目を見開いた。けれどもルーセルは視線を合わせようとはせずに話を続けている。

「病院の前に捨てられてた」

リアも視線を落として、足元に注意しながら歩く。

「それを僕の話し相手につて、父が引き取った。ケリーさんの養女として。小さい頃は、アンと兄さんと3人でよく遊んだんだ。それこそ毎日のように、皆の目を盗んで街に行った」

でも… とルーセルの声が暗くなる。

「兄さんの勉強が増えて一緒に遊べなくなつて、それでもアンとはいつも一緒にいたんだ。だけど…」

ルーセルも勉強の時間が増えるようになって、アンもメイドとしての仕事をしなければならぬ時期が来た。

自分達の違いを、嫌でも認めなければならなくなつた頃。

アンは自分のことを王子と呼んで、お互いにそれぞれの生活に入つていけなくなつて。

「…そんな時、アンがいじめられてるのを知つたんだ」

「本当に!？」

勢いよく開けられた扉の音の後には、一瞬の静寂。

開け放たれた扉から吹き込む暖かな風を、心地よいと感じる者は誰もいない。

部屋の掃除をしていた2人のメイドは、突然の侵入者に固まっている。

「お、王子。まさか…」

聞いてしまったのですね、などと、わざわざ確かめなくなっちゃってわかる。

2人よりも青白い顔で立ち尽くすのは、この部屋の主、ルーセル。呆然と見つめるメイドの前で、彼の顔はどんどん真っ赤になっていく。

「なんでっ……」

言いかけて結局口をつぐみ、背を向けて去って行く。

残された2人のメイドは、王子が何をする気なのか検討もつかずに、ただおろおろするばかりだった。

……ねえ、知ってる？アンの話……

……ああ、聞いた聞いた。いじめられてたんでしょ？王子と仲いいからってひがまれて……

ルーセルの頭の中では、メイドの言葉がぐるぐると回っている。どうしよう。

自分は何も知らなかった。なのに、自分のせいでアンがいじめられていたなんて。

「アン！！！！」

アンが寝ているはずの寝室へと向かう。

風邪をこじらせたただだとルーセルは聞かれていた。それだって、うつったら困るからお見舞いに来る事すら止められていたのに。知らなかった。

「ルーセル？……どうしたの？」

そこにはアンが1人だけでベットの上に起き上がっていた。医者はいない。

「……聞いた、全部」

息を切らせて、ルーセルはそれだけ言った。アンは何も言わない。

「……ごめん。僕の……」

「謝らないで」

ぴしゃりと遮られてしまつて、咄嗟にルーセルは口を閉ざした。

「ルーセルのせいじゃない」

「……でも」

ルーセルは何か言わずにいらなかった。だって自分のせいじゃないか。

「なにも聞きたくないの」

ぎゅっとアンは耳を塞ぐ。いつもと違うアンの様子に、ルーセルは不安を感じてベットに近寄った。

「アン？」

「私の世界は、ここだけなの。どんなことがあつたって、私はここでしか生きていけない」

「……アン？」

アンはきつく目を閉じると、ルーセルを見ないまま言った。

「ごめん。……私、ルーセルのこと嫌いたくない。……だからそばにこないで」

「え？」

何を言われたのか、ルーセルには全く理解出来なかった。

アンは何を言つたんだ？

「なんで」

けれどもアンは何も言わない。彼の方を見ようもしない。

「僕は……いつだってアンの味方だ」

「……いらないって、言つてるじゃない……」

ぱつとアンが顔を上げた。その目は涙に濡れている。

「いらない！ルーセルなんかいらない！ルーセルさえいなければ、こんなことにならなかつたのに！私はもっと……普通の生活が送れたかもしれないのに！」

「……な」

ショックを受けると同時に、かすかな怒りも沸いてきた。

そしてこの場合、怒りに目を向けることの方が簡単だった。もうひとつの方は、考えるのは辛すぎたから。

「なんだよそれ…。僕がどれだけお前のこと気にかけてやったと思ってるんだよ！」

「誰も頼んでない！みんな…あたしのことをかわいそがってるだけじゃん！」

「僕は違う！僕は…」

「ルーセルは何も出来ないじゃない！」

「出来るよ！」

「じゃあ…あたしが死ねって言ったら、死ねるの？」

歪んだアンの微笑み。

「死ねるよ！」

咄嗟に、ルーセルはそこにあつた処置用の小さなハサミを手にとった。

……痛いとはあまり感じなかった。

目を見開くアンを見て、満足を感じたのは事実。

けれども、それがアンの心にどんな傷を残してしまうのか、ルーセルにはわかっていなかった。

「……怪我自体は、大した事なかったんだ」

暗い森の中、どこか自嘲的なルーセルの声が響く。

「でもアンは…すぐく責任を感じて、ご飯も食べなくなっちゃって、それで…死にそうになった。だからアンの記憶を消した」

「……………」

「アンは、笑って城にいてくれればいいんだ」

ああ、この王子は本当にアンのことが好きなんだ。痛々しいまっすぐさに、リアは何と言っていていいかわからなくなってしまう。

「大丈夫です。…こう見えて私はやりますからね。アンは大丈夫です」

明るいいリアの声に、ルーセルはかすかに笑って応えた。

リアは王宮へ最初に行った時の、心配そうな顔をしていた人々の事を思い出す。アンの育ての親だというケリー。何かを訴えるようにこちらを見つめていた人達。

皆きつとアンが好きで、アンの事を心配している人達だ。

アンを助けよう。それが例え破滅を導いたとしても、そうしたらその時また戦えばいい。

やっぱり私は魔法研究所の魔法使いには合わないなあ。

不思議に清々しい気持ちで、リアはそんなことを思った。

「あそこ…」

ルーセルが呟いて指差した先では、森が開けて月明かりが差し込んでいた。

リアはかすかに頷いた。

さつきから、とんでもなく大きな魔力を感じている。

駆け出そうとするルーセルの腕を慌てて掴んで、リアは静かにするよう合図した。彼は何か言いたそうな顔をしたが、真剣なリアの顔を見ると頷いてその場に留まった。

おそらくフォロンはとくに自分達のこと気付いているはずだ。紫水晶を持っていないことも。

リアは高速で頭を働かせながら、じりじりと歩を進めた。

やがて2人の目の前に、月光を映し出す美しい湖が現れた。今まで気味悪さも手伝って、まるで異世界へ続く扉のような神秘的な湖だった。

だがそのほとりには、何の姿もない。

（違う…）

リアはじつと目を閉じ息を殺した。

フォロンとアンはここにいる。結界を張って、姿を見えなくしているだけだ。

その時、沈黙を破るように少女の声が聞こえた。

「…来ないよ」

ルーセルが動き出そうとするが、リアは手の力を緩めずに彼を引き止める。

相手はこちらを誘っているのだ。それにのうのうと乗ってやるほどリアは馬鹿ではない。

「…何故？」

どこか優しさをにじませる声に、リアは緊張がゆるんでしまった。誰かの声に似ている、と思う。

想像していたような残忍な魔族とは、どこか違う気がした。

「だって、あたしが必要な人なんて、どこにもいないし…」

「何だよそれ！」

リアはぎよつとしたがもう遅い。

捕まえる腕の力が弱まった隙に、ルーセルは茂みから飛び出してしまっていた。

そのままずかずかと池のほとりに歩いて行ってしまっ。

「あーもう！」

リアも仕方なしに彼の後を追う。

「アン！どこにいるんだよ、さっさと出てこいよ！」

「ルーセル！ちよつと、落ち着いて…！」

これでは2人は格好の標的だ。

「必要ないとか、何馬鹿なこと言ってんだよ！早く帰ろっ！皆心配してるんだ…！」

「ルーセル…」

少女の声。

「！」

はっとしてリアは右前方…アンの声がした方向に向かって衝撃派を放った。

ばちばちと音がして、結界が崩れる。

「アン…！」

そこには、メイド服を着たアンが座っていた。彼女が座っているのはまるで貴族の庭から借りてきたような白いすで、揃いのテーブルの向かい側にもまた美形の人物が座っていた。

「フォロン？」

「おおっといきなり名前を呼びますかね」

フォロンは人間だった…。いや違う、すごく美形の男の姿をしていた。

金色の髪、青い瞳、優しい微笑みを浮かべる口元。リアでさえも、思わず見惚れてしまったほどだ。

そう、例えば優しく微笑まれたら、何でも差し出してしまうような……。

「来ないで！」

悲鳴に似たアンの声に、リアは意識を引き戻された。

アンはルーセルを見ていた。

「…どうして。助けに来たんだ。帰ろう」

アンに向かって手を伸ばしたまま、困惑した顔でルーセルは尋ねた。
「助けに来てなんて誰が言ったの」

リアはフォロンを凝視した。彼は意味深な笑みを浮かべて、アンとルーセルを眺めている。戦闘態勢ではない。

何なの？ 一体……

リアには意味がわからなかった。

「私は帰らない」

「……は？」

自分の耳はおかしくなってしまったのではないかと、本気でルーセルは疑った。

アンはしっかりと顔を上げ、ルーセルに向かって言い切った。
「私は、自分からここに来たの」

第5話

「アン、大丈夫だから。帰ろう。もう平気だよ」

アンは何か悪い魔法をかけられて、そのせいでこんなことを言うてるんだとルーセルは思った。

が、アンは頑としてその場を動こうとはせず、フォロンの背に隠れてしまった。

とうとうルーセルは自分が間違っていると認めざるを得ない。

「……何をしたの？」

リアはぎつとフォロンを睨み付けたが、フォロンは彼女を無視して話し出す。

「アンは私と一緒にいたいんだってさ」

見下ろされてそう言われても、ルーセルは絶望の眼差しでアンを見つめるばかりだ。

「人間は不便だと思わないかい？誰かと交わって生きていかなくはない。1人じゃ生きられない。でも私達は、そんな事はない自由だ」

「だったら…アンは関係ないでしょ。その子は人間でしょ」

「まだわからないのかい？」

さも馬鹿にした表情でフォロンは言った。かちんときたが、素直にけんかを売っても勝てる相手ではないとわかっていいるから、リアは睨み付けるしかない。

「アンは本当に、自分からここへ来たんだ」

「……じゃあ、紫水晶は何なの」

「別に？ちよつとやってみただけさ。一体何人が、彼女を助けに来るんだろうつて、ね」

「……………！」

「てめえっ……！」

「！やめっ……！」

止める間もなかった。

フォロンに掴みかかろうとしたルーセルが、次の瞬間には弾き飛ばされていた。そのまま近くの木にぶつかり、ぐったりと動かなくなる。

「ルーセル！」

悲鳴のようなアンの声。

彼女はフォロンの背から抜け出して、ルーセルの方へ駆けていく。

「ルーセル、ルーセル！」

リアは杖を取り出したまま、フォロンの前に立ちはだかっていた。

「…助けてあげないのかい？」

やはり意味深な笑顔のままフォロンはそう聞く。

そりゃ助けたいのはやまやまだ。

だが、背を向けた瞬間、何をされるかわかったものじゃない。

2人を守るのは自分しかないのだと、リアは自分に言い聞かせた。

「何が目的なの？」

「……本当に人間は不便だね。同情するよ」

彼の表情に、リアはますます混乱する。

「それで？魔法使い、君はどうするつもり？ここで私と戦うのかい？」

それも方法としては考えていた。

リアがフォロンの気を引いているうちに、2人を逃がす。でも今はもう無理だ。ルーセルは動けないし、アンはあんな状態だ。

「はやく！どっちでもいいからルーセルを助けてよ！フォロン！あなたは…こんな事する人じゃないはずでしょ！助けてよ、ルーセルを助けてよ！！」

「…アン…」

かすかなうめき声に、リアははっとして振り向いた。

「ルーセル！」

どうやら気を失っていただけのようだ。

「ルーセル、大丈夫！？ご、ごめんなさい。…私のせいで、こんな……」

「まるで、あの時と同じだね、アン」

フォロンの言葉に、その場にいる誰もが凍りついた。

じゃああたしが死ねって言ったら死ねるの？

死ねるよ

「悪趣味……」

リアの言葉に、フォロンはにっこりと笑って見せた。
そろそろ我慢も限界だ。

ルーセルははつとしてアンを見上げた。

アンはさつと視線を反らす。

それが、全ての真実を物語っていた。

「思い出したから……？だから、ここに……」

「……ごめんなさい」

フォロンにどなりちらしたい所を、ルーセルはぐつと我慢した。
今大切なのは、そんなことじゃない。

「だから、城にいらなかったのか？」

こくりとアンは頷く。

「だって…私、皆に迷惑ばかりで、嫌な思いさせてばかりで、もうやだよ…。誰もいない所に行きたい……」

「そんなの無理だ」

ルーセルはきつぱりと言い切った。

「アンがそう思うのは、皆のことが好きだからだ。皆、僕だって、アンが好きだ。だから、アンがあの子のことを忘れても、一緒にいたかったんじゃないか！」

その時、背後で爆風が起こり、リアの声が聞こえてきた。

「2人とも、早く逃げて！！」

「……行こう！」

立ち上がって差し出されたルーセルの手を、アンは少しの逡巡の後、ぎゅっと握り返した。

「予告なしにいきなりはひどくないか？」

と言いつつも全く堪えてない顔でフォロンは言う。その顔はどこか楽しそうだ。

「……………」

背筋を冷たい汗が流れるのがわかった。

本当に、2人がこの森を抜けるまで待つかどうかわからない。けれど……

「本当に、人間は不便だ。……でも、興味深い生き物でもある」

「魔族に言われたくない！爆ぜる炎の精たちよ……」

言いながらとにかく見掛けだけは派手な呪文を放つ。

森を抜けるにはどれくらい必要だろうか。

「君はどうして私に刃向かう？敵わないとわかっているのに」ムツとしてリアは言い返す。

「そんなのわかんないじゃない！油断してるとあんただって危ないわよ！この地を司る27の……」

と言いつつも、敵わないのはわかっていた。

何しろ攻撃しているのはリアだけで、彼はただそれを防いでいるだ

けなのだ。まるで子供の相手をしているように余裕な態度だ。

「どうして人間はそんなに簡単に自分の命を粗末にするんだろう？」

私は永く生きてきたが…それだけはわからん」

「それにあたしも入ってんならそれは大きな間違いよ！だってあたしは死なないしね！我が前にその形を示せ…」

次の攻撃も、フォロンは難なく受け止める。

「それから明らかに自分よりも強い相手に向かって行くのも…魔族では考えられないな」

「だからあんたは人間つてものをわかってないって言うてんのよ！次行くわよ破魔の血をひく月の乙女、その碧き…」

「私と戦いたいのか？」

「！」

がっつと鈍い音がして、次に目を開けた瞬間にはフォロンの大きな手で口を塞がれていた。

「だが、少し話さないか？アンもいなくなってしまうたし…寂しいんだ」

「」

リアはまじまじと目の前に立つ魔族を見返した。

今、この口が寂しいと言ったのか？

「だから、この手を離しても魔法を唱えないで欲しいんだが」

そつと手を離されても、リアは魔法を唱えなかった。驚きで声が出なかったのだ。

「あなた…変わってる」

フォロンはいすに座りながら苦笑した。

「よく言われる。でも…他人のぬくもりを知ってしまうと、魔族だつて寂しさを感じるんだ」

「」

勧められるままに、リアもいすに座った。

どこか遠くを見るフォロンの青い瞳。それを見つめていると、リアの興奮も段々と収まってきた。

「アンはもう大丈夫よ」

言いよどんで、もうひとこと付け足した。

「…ルーセルが、そばにいるから」

「よかった」

そう言っただけで笑うフォロンは本当に人間みたいで、リアはますます変な気持ちになっていく。

今まで、魔族というのはとにかく危険なだけだと思っていた。

でも、フォロンは違う。

「アンと会ったのは今日が初めてなんだ。私を一目見ただけで、連れて行っただけで帰ってきた」

こんなに楽しそうに人間の話を話す魔族なんて、いるはずがないのに。

「多分私達は似てたんだろう。1人で…」

リアははっとした。

「もしかして、紫水晶を要求したのは…」

ルーセルをここに呼ぶため？

フォロンは意味深な笑みを浮かべた。

「暇つぶしさ」

リアは黙って頷くと苦笑した。

「さて、どうする？戦いを続けようか？君はさっきからずっと、戦いたそうだったけれど…」

「い、いいえ！！」

思わず首を振ってしまった。しまったと思った。これではあまりに情けないではないか。

見ればフォロンも笑っている。

「では、それはまたの機会にしよう」

音を立てずにフォロンが席を立った。

「どこに行くの？」

「さあ？また、何かおもしろいことを探しに」

その時の笑顔に、リアは言い知れない寂しさを感じた。彼は自分の

居場所を探しているのかもしれない。

リアも静かに席を立った。

「フォロン」

「……なんだい？」

「私たち、友達になれないかな」

「友達に……？」

珍しい生き物でも見るように彼は振り返る。

「私はリア。リア・マクフィーン」

今度こそ本当に、彼は驚いたようだった。

「…本気かい？」

「当たり前でしょ」

しばらくの沈黙。フォロンは顎に手をあてて黙った後、また口元にあの笑みを浮かべる。

「わかった、リア。退屈になったら遊びに来るよ」

リアは笑って頷いた。

「私の所に来てね。今回みたいなことは、もうしちゃダメだよ」

「努力する」

リアに睨まれて、フォロンは肩を揺らして笑ってみせた。本物の人間よりも人間らしく。

思わずその綺麗な笑顔に見惚れてしまって、リアは顔を赤くした。

「リア」

背を向いていたフォロンが思いついたように振り返って、リアの顔を覗き込む。

「友達になろうと言ったのは、私が美形だったからかい？」

「は……」

リアが反応を返す前に、彼は素早く頬にキスをして、笑った。ような気がした。

彼女が気付いたときには、彼の姿はもう消えていたから。

第6話

「王子！」

手を繋いで、ひたすら外を目指して走っていたルーセルとアンは、聞きなれた声に足を止めた。

「アレン！」

こちらへ向かってくるのは、黒髪の魔法使い。

彼はルーセル達を認めると、ほっとした笑顔を浮かべたが、すぐにそれは険しい表情に変わった。

「リアは！？」

「まだ奥に、魔物が……！！」

アレンはひとつ頷いた。

「俺が行きます。王子はアンを連れて城へ戻ってください。……出来ませんよね？」

ルーセルは大きく頷いた。

これであの魔法使いは大丈夫だ。そう思ってほっとした。アレンがいてくれるなら、大丈夫だ。

彼と別れ、2人は再び暗い森の中を駆けていく。

「出口だ……」

明るい月明かりの下へ出てくると、思わずその場に膝をついた。全力疾走をしてきたせいで、お互いすぐには口が聞けなかった。荒い息の中、ルーセルは隣に座り込むアンへと視線をやる。

そして固まった。

「ど、どうしたんだよ、アン……」

アンはぼろぼろと泣いていたのだ。

「え？あれ……？」

本人だつて驚いている。ルーセルにはどうして泣いているのかますますわからない。

でも、どこかほっとしてもいた。

アンは自分の前で泣いたことも、弱音を吐いたこともなかったから。彼はぎこちなくアンの傍に膝をついて、その肩をぎゅっと抱きしめた。

ようやく、心の底からほっとできた。

アンは生きてる。ちゃんとここで泣いてる。

やがてアンが、ぽつりと呟いた。

「ごめんなさい…」

「いいよ」

本当は全然よくなかった。

どうして自分じゃなくフォロンに助けを求めたのか。どうして自分には何も言ってくれなかったのか。

皆本当に心配してたんだと、アンにわからせてやりたかった。

それは優しさだけじゃなくて、頼りにされなかった悔しさとか、どこか凶暴な気持ちから。

でも、もういい。

「ごめん。ごめんなさい…」

「いいってば」

もう、どこにも行かないでくれれば。

ちゃんと自分に弱音を吐いて、こうやって傍にいてくれるなら。言えない代わりにルーセルは、アンを抱く腕に力を込めた。

「リア！」

自分と呼ぶ声にリアは驚いて振り向いた。

「アレン…!？」

木々の影から、所々に葉っぱをくつつけたアレンが現れた。ひどく慌てているようだ。

リアの頭から血が引いた。どうしよう。こんなに早く彼が来るとは思わなかった。言い訳すら思いつかない。

「す、すみません！あのこれは…」

「…お前なあ…」

がくーっとその場に膝をつくアレんに、慌ててリアは腕を貸す。

「だ、大丈夫ですか！…あの、ほんとすみません。でも…なんでわかつたんですか？」

申し訳ない気持ちと同じくらい、リアは彼に動向を気付かれてしまったことが悔しくて仕方なかった。

絶対出し抜いてやれると思っていたのに。

「お前な…。俺が本当にあのままお前を放っておくと思ったのか？」
「……………」

リアはぽかんと口を開けた。

「…え？……え？え？」

それはどういうことだ？

「国王を説得してたら、来るのが遅くなっちまった」

「国王??？」

リアは頭がついていかない。

「彼は本当は、アンを助けたがってたんだ。自分の娘のようなものだからな。でも、臣下の手前ああ言うしかなくて。だけどあの後、自分が助けに行くって聞かなくて、ずっと説得してたんだ」

「……………」

昼間とは別人のようにしゃべりまくる彼に、リアはぽかんとしてしまっ

「それよりも、魔族はどうしたんだ？」

突然真剣な顔になったアレんに、リアははっとした。

「…い、行きました」

「行っただ？」

「どっかに行きました」

「はあ!？」

今度こそ本当に、間の抜けた声をアレンは上げる。

「…ああ、そっか。まあいいや。皆無事みたいだし」

あつさりとアレンはその事実を受け止められるようだった。リアの方を向いて照れくさそうに笑って見せた。

「今日はごめん。でも…助かった。ありがとう、王子を守ってくれて」

「…わ、私の方こそ、すみませんでした。誤解して…」

「誤解？」

「…アンのことなんて、どうでもいいと思ってるんだと、誤解してました…」

「…誤解じゃないな、それは」

「？」

訝りの視線を向けると、彼はふっと笑みを浮かべた。

「俺にとって1番の優先事項は、この国を守ることだから。…そりゃあアンのことを助けたいとは思ってたけど、いざとなったら犠牲になってもしょうがないと思ってた」

「…どうしてですか」

アンが助かって、もう大丈夫だと思ったからだろうか。昼間のような激しい怒りは沸いてこない。けれど、素直には受け入れがたかった。

彼のことを見直したばかりだったのに。

「それが仕事だから」

「……」

迷いなんかない、真っ直ぐな口調だった。リアは反論しようとして、でも彼に敵わない気がして何も言えない。

「綺麗だな」

アレンに倣って、リアも泉を見渡す。

暗い森も、うつそうと茂った木も、今はもうあまり不気味には見えなかった。

ああ、彼にも綺麗に見えるんだ。

悲しいような嬉しいような、自分でもわからない気持ちでリアは笑う。

きつとフオロンもここを綺麗だと思ったんだろう。

その日も、ルーセルは不機嫌だった。

今日もアンは城にいなかった。折角の休憩時間にも、もう彼の所に来なくなった。

「アレン！」

城に来ていたらしいアレンを廊下に見つけて、声をかける。

「王子、どうしたんですか？」

その声はどこか楽しそうだ。そりやそうだ、ルーセルが不機嫌な理由を、この男は知ってるに違いないのだから。

「またアンが研究所に行ってる」

「ああ、知ってます。おいしいパイを持ってきてくれました」

アンは最近お菓子作りにこっていた。まあ、それはいいでしょう。

ただ、その理由が、リアの所に行く時に何か持って行こうと思って始めたものだからおもしろくない。

「何ですか王子、女性相手にやきもちですか？」

負けじとルーセルもやり返す。

「アレンこそ、恋人がずっと年下の女の子の相手ばかりしていいの？」

「！ちがつ……！」

「ああ、ごめん。まだ違うんだっけ」

まだ、の所を特に強調して言ってる。

がく、とアレンの動きが止まった。

「な、何言ってるんですか……ははは……」

動揺してる。

ルーセルはほくそ笑んだが、全然満足できなかった。

アレンをいじめたって、そこにアンがいけないという事実は変わらないのだから。

「ルーセル！」

とそこへ、明るいアンの声が割り込んできて、彼は驚いて振り返った。

「アン？」

なんでここに？

アレンがしのび笑いをもらしながら去って行く。

「よかった。あのね、やつとおいしいパイが焼けるようになったんです！リアさんてば、お菓子好きなだけあつてうるさいの！はい」
アンは持っていたバスケットを、ルーセルの目の前に差し出した。
何がはい、なのか、ルーセルにはまだよくわからない。

「食べて。自信作だから！」

「…え？」

頭の中で事実を組み立てて、ようやく意味がわかった。
頭にかーっと血が昇るのが自分でもわかる。有難いことにアンは気付かなかったみたいだけど。

「……もしかして、嫌い？」

「…ちがう…」

たとえ嫌いでも不味くても、ルーセルはおいしいと言っただろう。
もっとも、それは本当においしかった訳なのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5361i/>

魔法使いの夜

2011年1月27日09時51分発行